

Title	宇治十帖<解体>と<閉塞>の論理（上）
Author(s)	中井, 賢一
Citation	詞林. 2007, 41, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67562">https://doi.org/10.18910/67562</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 宇治十帖〈解体〉と〈閉塞〉の論理（上）

中井 賢一

はじめに

源氏物語は不自然な中絶感を伴って終焉を迎える。『湖月抄』に「習ひにとぞとあるは、書きさしたるやうなり」とされるように、古来、この中絶感は看取されてきた。

言うまでもなく、これは、薫の迷妄とも相俟って浮舟の未来に何らの具体的展望も与えられないまま物語が閉じること  
に起因するものである。「あいまいさという終りは源氏物語の至り達した結論」とまで言われるところである。確かに、薫の申し入れに沈黙でしか応じられない浮舟の姿は、「救済と非救済」の「限界」を「沈黙」によって呈示するばかりに映らう。また、浮舟に送られる横河僧都の消息にしても、還俗勸奨か非還俗勸奨か「玉虫色で二重に読める」ような「あいまいさ」を醸しており、浮舟を明確に未来に誘導する規制力にはなり得ていない。

つまり、この後浮舟をどう動かそうとするのか、物語は、その手掛かりを明らかにしないまま最終結しているのである。

浮舟の「法の師」の言にして、浮舟の未来を示唆すらしめない  
のであってみれば、物語が浮舟の「沈黙」に大きな意味を与  
えているようにも思われてくる。何らかの論理によって、浮  
舟「沈黙」という終焉は物語に必然化しているのではないか  
だとすれば、なぜ物語は浮舟にそれを強いねばならなかった  
のか。

また、私は、拙稿「『夜ごと』に十五日づつ』通う夕霧」に  
おいて、匂宮に中君との御子が誕生して後三年間、及び、東  
宮、二宮については、匂宮巻に夕霧の大君、中君の興入れを  
受けた事実が記されて以来、実に十五年間以上も御子の誕生  
が無く、人間関係の【系図】が全く動かない事実を取り上げ、  
その不可解さについて、物語が敢えて政治的パワーバランス  
が変化しないよう仕組んでいると考えた。恋や御子の誕生が  
都の権力体制へと繋がる、そういった「栄華」のありかたが、  
物語の進行に従って滞っていく様、そして、それに浮舟が大  
きく関与している様について考察している。いわば、浮舟は  
都の権力体制の膨張を〈閉塞〉させるべく、物語展開に大き

く機能する人物なのである。このような浮舟の機能を、「沈黙」という終焉」と考え合わせる必要はないか。

更に、【系図】が動かないことと関わって、第三部の不自然な政治的設定についても看過できない。夕霧大君の参内を受けた東宮は二十一歳、この時既に二宮が皇太弟として内定している。三宮たる匂宮が宇治中君との間に若宮を儲けたのが二十七歳の時であるから、二十一歳の東宮が早々と皇太子を立てられない設定になっている点は注目される。また、少なくとも総角巻では匂宮も東宮候補となっており、事は二宮においても同様であることが知られる。なぜ、物語は皇太子の可能性を排除し、早々と「連続する皇太弟」を設定に組み込んだのか。

「沈黙」する浮舟と、〈閉塞〉する都の権力体制。そして、背景に透けて見える奇妙な「連続する皇太弟」。果たして、これらには関係があるのか。そして、どのような仕組みによって物語に必然化されているのか。本稿においては、源氏物語の全体構造を併せ考えることで、それらが必然化される論理について読み解くことを試みる。

手順として、先ず本稿(上)において、源氏物語を通じて底流する対時的〈二層〉構造と、それぞれの〈層〉における更なる対照的一對の存在について整理し、源氏物語の構造的特徴について概観する。続いて、それら〈二層〉構造が、正編世界と続編世界においてどのような相違を発生させるか、

宇治という場に由来する人間関係とその影響という観点から、宇治十帖全体の機能的意義について定位する。それらを踏まえ、本稿(下)において、浮舟の機能と宇治十帖の機能との関わり、及び浮舟と源氏物語の全体構造との関わりについて言及することとする。

#### 一 明暗〈一對〉の構図

源氏物語の物語展開を支える構造的特徴について、私は、〈二層〉構造」と呼び、相容れることのない二つの対照的な物語が、あたかも〈層〉を成すごとく併存している、と考えた。光源氏と夕霧が、共通した主人公性を付与されているにも拘わらず、両者の権力体制の生成方法が完全に対照的であることを基点に、「罪の恋と栄華」が関わる劇的な物語と、それとは対照的な、功利的、撰閲家的な「恋と栄華」が関わる物語とが対照的に存在しており、前者を光源氏が領導し、後者を夕霧が領導している、と見たのであった。いわば、対照的な〈源氏〉の「栄華」が、〈二層〉を成して並立する仕組みになっているのである。

ところで、このそれぞれの〈層〉のモチーフと関わった人物造型を成されるのは、果たして光源氏と夕霧のみなのだろうか。否、両者がそれぞれ関わる人物たちを概観したとき、他にもモチーフを共通させる人物が存在することに気付く。「罪の恋と栄華」のモチーフは、光源氏以外にも柏木を連想

させようし、「恋と栄華」のそれは、夕霧のみならず、かつての弁少将、紅梅大納言をも連想させよう。煩を厭わず、それぞれ確認せねばなるまい。

極めて劇的な「罪の恋」は、光源氏以外では柏木と匂宮にしか描かれない。周知の通り、柏木は女三宮への「罪の恋」を描かれる。女三宮事件においては、両者が対峙を余儀なくされており、光源氏と柏木はこの〈層〉のモチーフを担わされた一対と言えるだろう。匂宮については、無論、光源氏との対峙もなく、光源氏死後、むしろ光源氏の後継としてこの〈層〉に関わると考えるべきである。後に触れることにする。

次に、夕霧の「恋と栄華」の〈層〉であるが、無論、恋、出産、政略結婚までもが権力体制の根幹を成す、撰閲家的「栄華」が描かれる物語〈層〉である。夕霧は、大君と中君を東宮と二宮にそれぞれ参らせ、六の君を匂宮に参らせている。のみならず、落葉宮との結婚で家の格上げも叶い、皇族とのコネクションはより強固なものになっている。あたかも幾重にも張り巡らされた網の目のごとく、夕霧は今上帝一族と近しく結び付くことで、権力を長期に亘って掌握しようとする。いわば、この「権力の網の目」(後掲【系図2】点線部)が都を牛耳るのである。紅梅は、竹河巻時点で左大臣夕霧に次ぐ右大臣である。夕霧同様、故北の方との娘大君は東宮に興入れさせ、中君は匂宮に参らせるべく画策していた。のみならず、「この宮(女二宮)の御母女御をぞ、むかし心かけき

こえ給へりけるを(「中略」)はては宮を得たてまつらむの心つきたりければ(宿木卷二〇七頁)とあって、自身も女二宮の降嫁を申し入れていた。それらの成果はさておき、「権力の網の目」に食い込むための思考のありかたとしては、夕霧のそれと完全に重なっており、今上帝一族との連繫を競い合うライバルと言えよう。その点において夕霧と紅梅とは、この〈層〉のモチーフに深く根差した一対と、これも言えそうである。つまり、「罪の恋と栄華」の〈層〉には光源氏と柏木が、「恋と栄華」の〈層〉には夕霧と紅梅が、それぞれ〈一対〉として配置されているようなのである。

私は、旧稿「柏木不在の論理」において、次のように述べた。女三宮事件の真相を知った光源氏は、女三宮に対する批判は手厳しく行うものの、それに比して柏木その人に対する非難は極めて甘く、柏木はこの物語において光源氏寄りの、光源氏の身内的な人物として造型されている。また、六条院の催事を取り仕切り体裁を整える人物は、夕霧ではなく柏木であり、柏木は光源氏世界の「栄華」に寄与する、いわば「援護的機能」を果たしている。女三宮との密通による薫の誕生も、光源氏の「栄華」の長期化に貢献するものであり、その「援護的機能」の産物と見るべきである。以上のように指摘したのであった。

光源氏は、自分を裏切った柏木の「罪の恋」を非難しない。「いとかくさやかに書くべしや、あたらの人のふみをこそ思

ひやりなく書ききれ、落ち散ることもこそ、と(自分は)思ひしかば、むかしかやうにこまかなるべきおりふしにも、言そぎつゝこそ書き紛はししか、人の深きようゐはかたきわざなりけり(若菜下巻三八四頁)と、手紙の書きぶりに注意が払われていない点を指摘するばかりで、自分ならもっと注意深く書き紛らわすのに、と、敵視すべき柏木を自分に重ねて済ませてしまう。また、光源氏は「恋の山路は、えもどくまじき御心まじりける」(若菜下巻三八六頁)という結論に達するが、「恋の山路に迷う、心は非難できまいというお気持」なのであってみれば、これも「罪の恋」そのものについては容認していると言わざるを得ない。自分に反旗を翻した存在に対して寛大に過ぎると思うのである。この不自然さは、人物論や主題論の観点からは、光源氏が柏木に自らの過去を重ね見たがゆえに責められなかった、といった類の説明がなされるところであろう。今井久代氏の「罪業に怯えながらも藤壺を求めずにはいられた自らの飽かぬ悲しさと、柏木の思いとを重ね合わせ、受容した」との説明が要領を得ている。

氏に敵対する反逆的行為でないなどと言っているのではない。光源氏の正妻との密通なのであるから、当然光源氏その人に對しては敵対したと言わざるを得ないし、柏木と光源氏との關係を対時的構図と把握することも妥当である。しかし、そのことよつて光源氏は薫を得ることにもなる。無論、薫は光源氏の子として、そして後継として世間に認知されよう。柏木は、光源氏の「罪の恋」に起因する強大な権力体制を次代へと引き継ぎ長期化させるべく機能した、とも言えるのである。つまり、光源氏亡き後もこの〈層〉の維持が保証されるのであり、そうである以上、やはり柏木は光源氏の〈層〉に「援護的機能」を働かせていると言わねばならないのだ。柏木は、薫を残すため、言い換えるならば、次代に亘つて光源氏の〈層〉を維持するため、光源氏との対時的構図において「援護的機能」を駆動させるのである。ここでは物語〈層〉の維持こそが優先させられている。源氏物語は、いわば〈層〉の論理に制御されつつ展開していく物語なのである。また、私は、同稿「柏木不在の論理」において、藤裏葉巻末、六条院行幸の場面が、実は雲居雁との結婚が成り意気揚々たる夕霧をこそ賞揚するものであることを指摘した上で、その壽ぎの場面に唱歌で参加するのが柏木でなくて弁少将、後の紅梅である事実について、夕霧と政治的に対峙し、権力体制を競っていくべき人物が柏木ではなく紅梅であるから、と考へた。夕霧と柏木でなく、夕霧と紅梅こそが同じ土俵で

向き合う（一対）であると考へたのである。前にも述べたとおり、第三部では夕霧と紅梅との政治的対峙は明らかであるが、補足として興味深い事例を挙げておく。

・宿曜に、「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべし」と勸へ申したりし事、…（濠標卷一〇〇—一〇一頁）

・まづ春宮の御ことを急ぎ給て、春日の神の御ことほりも、我世にやもし出で来て、故おとゞ（故太政大臣）の、院の女御の御こと（弘徽殿女御の立后が叶わなかつたこと）を胸いたくおぼしてやみにし慰めのこともあらなむ、と心のうちに祈りて、…（紅梅卷三三四頁）

前者は、いわゆる御子三人予言である。夕霧についての予言のみが物語中に実現しない点が特徴であるが、その論理については別稿として私見を述べた。今は夕霧に関わつた予言が黙殺されているという事実<sup>①</sup>に特に注意しておく。後者は、紅梅が大君を東宮に参らせる際の思惟である。「春日の神の御ことほりも、我世にやもし出で来て」というのは、「藤原氏から后が立つというような神託があつたという趣」である。紅梅としても、「我世」に実現すべき予言と信じたからこそ「春宮の御ことを急」いだのだろう。紅梅が自身についての予言と受け止めていることが知られる。しかし、言うまでもなく物語中に紅梅の大君が中宮に冊立される姿は描かれない。つまり、物語は、夕霧、紅梅に関わつた輝かしい未来の予言

の結末を、共に描かないのだ。この両者に共通の条件が付与されていることには注目して良い。政略結婚に権力体制の拡大を賭け、それぞれの「予言の結末」を見るために「恋と栄華」の〈層〉を生き続ける。両者は、完全に照応する〈一対〉なのである。

以上、見てきたとおり、光源氏と柏木、夕霧と紅梅は、それぞれの〈層〉に根差した、いわばそれぞれの〈層〉の論理を生かされる〈一対〉である。源氏物語の〈二層〉構造は、それぞれの〈層〉に根差す、生のモチーフを同じくする二人ずつの組み合わせを基に成立していたのである。

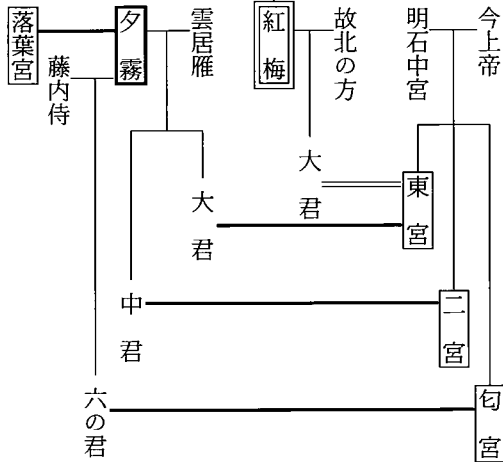
しかし、ここで注意しておきたいことがある。同一〈層〉の〈一対〉たる二人には、決定的な相違点もあるのである。まず、光源氏と柏木の組み合わせである。光源氏の権力体制が冷泉の存在を基盤にしていることは動くまい。明石姫君が立后するに至って、その体制はより堅固なものになつたと、明らかである。つまり、光源氏は、冷泉の由来たる藤壺との「罪の恋」を基点に強大な権力体制を構築したのである。明石姫君の存在もこの「罪の恋」ゆえの須磨明石退去がなければありえなかつた。いわば、光源氏は「罪の恋と栄華」という、この〈層〉のモチーフを完遂する、あるいは体現する人物としてあるのだ。では、対する柏木はどうか。女三宮との「罪の恋」に身を焼いたものの、自身は自死に近い状態で亡くなつてしまふ。落葉宮を通じて結ばれた皇族とのコネク

ションも断絶することになり、「栄華」と呼ぶにはほど遠い終焉を迎える。つまり、柏木はこの〈層〉のモチーフを完遂できない、あるいは体現できない人物としてあるのだ。

次に、夕霧と紅梅の組み合わせである。夕霧の権力体制は、前に見たとおり娘たちの政略結婚、そして自身の落葉宮との結婚によって幾重にも張り巡らされた皇族との連繫を基にしている。自らの恋と、その結果たる子女の存在がごとごとく権力体制に活かされるのであり、まさに「恋」が「栄華」に結実している。つまり、夕霧は、「恋と栄華」という、この〈層〉のモチーフを完遂し体現する人物としてあるのだ。では、対する紅梅はどうか。物語に表れる紅梅自身の恋と子女の処遇を追ってみよう。まず、紅梅は玉鬘に懸想し叶わなかった。後、真木柱と結婚し男君を儲けるが、その動向は不明である。真木柱の連れ子、宮の御方にも思いを懸けるが、匂宮の興味とも競合し、発展する様子は見られない。前にも見たとおり、後には女二宮の降嫁を申し入れたが、周知の通り、女二宮は薫に嫁する。かつてはその母麗景殿女御にも懸想していたが麗景殿は入内してしまう。大君を東宮に参らせはしたが、夕霧の大君と競合し、しかも東宮との間に御子はいない。中君を匂宮へと志すが、匂宮は乗り気でない。同じく中君を薫にも考えるが叶うことはない。どうやら紅梅は、恋が権力体制に効果的に結び付くことのない人物として造型されているらしい。就中、夕霧との決定的な差は、自身と内

親王との結婚の有無と娘を参内させる手数のの少なさであろう。  
**【系図1】**を確認しよう。皇族との繋がりのの手数は、夕霧が四（太実線部）、対する紅梅は一（二重線部）で、その差は歴然としている。

【系図1】



つまり、紅梅は、夕霧に次ぐ権力者で権力体制の構築方法や「思考のあり方」をも夕霧と同じくする人物であるにもか

かわらず、「恋」が「栄華」に結実する効率において夕霧に遠く及ばない人物なのだ。「恋と栄華」のモチーフを完遂できない、あるいは体現できない人物と云って良いだろう。

つまり、源氏物語の〈二層〉構造は、それぞれの〈層〉の内部に、その〈層〉のモチーフを体現できる人物と体現できない人物との対照的な組み合わせによって成立していると考えられる。仮に、体現できる人物をその〈層〉にとつての望ましい人物、いわば〈層〉の論理に適うキーパーソンと見て肯定的に捉え、逆に体現できない人物を否定的に捉えるならば、各〈層〉はそれぞれのモチーフについての成功者と失敗者、いわば、明と暗を〈一对〉として呈示しているとも考えられる。源氏物語の〈二層〉構造は、各〈層〉内部にも「明暗〈一对〉」という対峙的構図を抱え込んで成立していると言えよう。

## 二 宇治十帖の機能

栄華と関わった二つの〈層〉の物語は、第二部まで光源氏、そして夕霧によってそれぞれ誘導されていく。光源氏亡き第三部の物語においては、光源氏の〈層〉は「薫・匂宮・冷泉連繫体制」によって引き継がれることになる。匂宮巻頭「光隠れ給にし後、かの御影にたちつき給べき人……」の件に、いづれも光源氏の「罪の恋」に浅からぬゆかりを持つ薫、匂宮、冷泉の名が挙がり、夕霧の名は挙がらないということがその

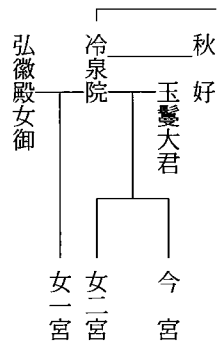
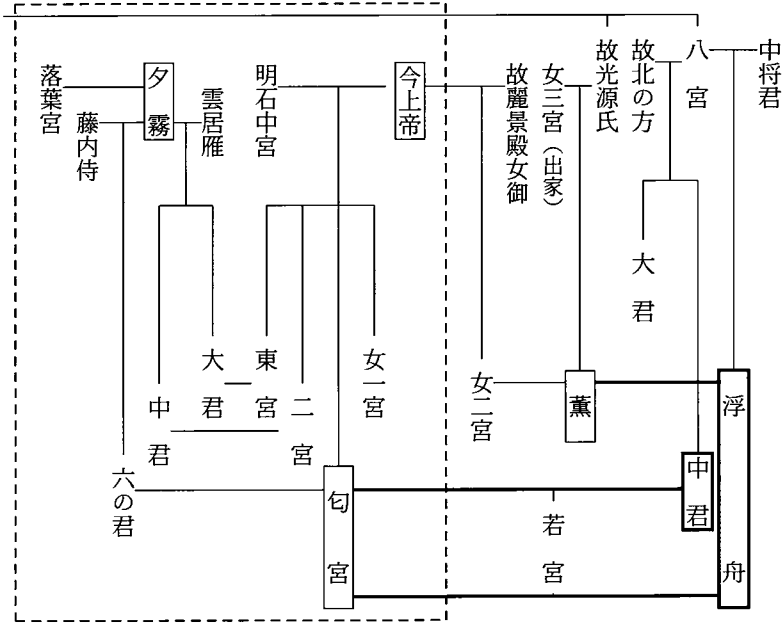
徴表であり、光源氏や夕霧と共通する主人公性を付与されている薫が三者の主軸である、と私は考えた。<sup>14)</sup>

ここで、光源氏の〈層〉を受け継ぐべきこの三者について、第三部、就中宇治十帖における系図を確認しておこう。【系図2】として掲げておく。なお、この【系図2】が、「はじめに」でも触れた、権力体制の膨張を〈閉塞〉させるかのごとく、長期に亘って動かなくなるそれである。

先ず確認しておきたいのは、前にも述べたとおり、今上帝一族と夕霧一族との連繫の強さである。後見者に何らの欠損も抱えず、両一族には長期的な権力集中が見込まれる。この「権力の網の目」【系図2】(点線部)は、まさに、夕霧が主導する「恋と栄華」の土壌として相応しいと言えよう。そして、更に確認しておくべきなのは、「罪の恋と栄華」の〈層〉を引き継ぐ一員たるべき匂宮が、逆にこの「権力の網の目」の直中に取り込まれていることである。仮に、匂宮が宇治中君と結ばれることなく六の君との間に男御子を儲けたとすれば、「権力の網の目」は夕霧権力体制の長期化を保証することになり、むしろ匂宮は、夕霧の「恋と栄華」の〈層〉の発展に貢献することになっていたのだ。



【系図②】



しかし、周知の通り、勾宮は夕霧らの期待と思惑を見事に裏切り、宇治中君と結ばれ、東宮候補となる若宮を持つことになる。つまり、勾宮のこの動きは、夕霧の〈層〉に対する攻撃、あるいは夕霧に取り込まれることに対する反抗とも言えるのである。言い換えるならば、勾宮と中君との結びつきは、「権力の網の目」の膨張を断ち切り、「恋と栄華」の〈層〉の強化を阻止する動きだったことになる。そして、中君は、勾宮が「権力の網の目」に取り込まれるのを防ぐべく機能したことになるのだ。勾宮の目が宇治に向き、「権力の網の目」から勾宮の目が逸れば逸れるほど、「恋と栄華」の〈層〉は発展の機会を失っていくのである。

そうあってみれば、中君が京に迎えられた後の勾宮の目を、再び宇治に振り向ける浮舟の意義は、更に大きいと捉えるべきであろう。しかも、浮舟は薫をも宇治に引き付け、都の關係から切り離す。どうやら浮舟は大きな機能的意義を持つ重要な人物らしい。本稿(下)で考える。つまり、宇治世界に生

起する人間関係が、都の「恋と栄華」の〈層〉の〈閉塞〉を促すべく機能しているのである。源氏物語の〈二層〉構造に関わる宇治十帖の機能的特徴として、まず一点押さえておくことにする。

さて、宇治十帖の物語が「恋と栄華」の物語〈層〉に關する仕組みについて考えてきたが、ではもう一方、「罪の恋と栄華」の物語〈層〉については関わらないのだろうか。別の言い方をするなら、「恋と栄華」の〈層〉が〈閉塞〉した必然として、「罪の恋と栄華」の〈層〉の優位を物語としては言挙げするのであろうか。ところが、そうではないようである。前に述べたとおり、「罪の恋と栄華」の〈層〉を後継するのは「薫・匂宮・冷泉連繫体制」であり、その主軸は薫と思われる。言うまでもないことだが、薫は自らの出生の不安ゆえに、都に身の置き所がない居心地の悪さを覚え、宇治八宮の俗聖というありかたに傾倒することになる。つまり、薫にとっては、出生に関わる「罪」意識からの逃避のために、宇治世界への傾斜が必然化されたのである。「罪」意識を和らげるために、と言っても良い。そうあってみれば、本来、薫にとって宇治世界とは、「罪」を解消するための、いわば贖罪の世界であり、道心をかき立てる場であるはずであらう。ところが、宇治は薫にとってそのような〈場〉としては機能していないようなのだ。

・かやうの古人は、問はず語りにや、あやしきことのためし

に言ひ出づらむ、と苦しくおぼせど、かへすくも散らさぬよしを誓ひつる、さもやと、また思ひ乱れたまふ。

(橋姫卷三三三―三三三頁)

・古人の問はず語り、みな例のことなれば、をしなべてあはくしうなどは言ひひろげずとも、いとほづかしげなめる御心どもには聞きをき給へらむかし、とをしはからるゝが、ねたくもいとおしくもおぼゆるにぞ、又もて離れてはやまじと思ひ寄らるゝつまにもなりぬべき。(椎本卷三六三頁)

前者、薫は、自身の出生の秘密を知る弁尼について、「かへすくも散らさぬよしを誓ひつる、さもや」と、弁尼を信じて良いものか、本当に他言しないか、不安に思う。後者、老人が問はず語りに言い出すことは十分にあり得るのだからやはり信用しきれないと思ひ迷った挙げ句、薫は、大君、中君たちが「聞きをき給へらむかし」と結論付け、それゆえ「又もて離れてはやまじ」と決意する。

問題は二つある。まず、薫が自らの「罪」を隠そうとしてゐること。次に、そしてそのために大君や中君との恋を望むに至ること、である。「罪」を隠すために宇治に通うこと、そして、それゆえ大君、中君との恋に身を投じること、それは、明らかに「贖罪」としての「道心」に反する。そのことは、とりもなおさず、薫にとっての宇治が、「贖罪」の場、あるいは「道心」をかき立てる〈場〉では、いずれもあり得ないことを意味する。別の例を挙げてみる。

a とにかくに (大君に) 心を染めけむだにくやくしく、かばかりの世の中を思すてむの心に、身づからもかなはずりけりと、人わろく思しらるゝを… (総角卷四〇九頁)

b むかしの人 (大君) に心をしめてしのち、大方の世をも思ひ離れて澄みはてたりし方の心も濁りそめにしかば… (宿木卷三八頁)

c 疎きものからをろかならず (大君を) 思ひそめきこえ侍しひとふしに、かの本意の聖心はさすがに違ひやしにけん。 (宿木卷八〇頁)

a の「世の中を思すてむの心」、b の「大方の世をも思ひ離れて澄みはてたりし方の心」、c の「聖心」は、いずれも薫の属性として当初から付与されていた「道心」に間違いなからう。つまり、これら三例とも、点線部から明らかなおと、大君との恋を経験することによって「道心」を失っていった、と薫自身が位置付けているという点で共通している。私は、「恋」が「道心」と対極のものである、という当然のことを確認したのではない。私は、薫が宇治という〈場〉で行ったことが、あるいは宇治という〈場〉に生起した人間関係が、薫の「道心」の去勢に立ち働いているということ、そして薫の「罪」意識の去勢に立ち働いていることを強調したいのである。更に別の例を挙げてみる。

① (大君の死が) まことに世の中を思すてはつるしるべきらば、おそろしげにうきことの、かなしさもさめぬべき

(大君の) ふしをだに見つけさせ給へ、と仏を念じ給へど、いとゞ思のどめむ方なくのみあれば… (総角卷四九〇四六〇頁)

② かく世のいと心うくおぼゆるついでに、本意遂げんとおぼさるれど、三条の宮のおぼされむことに憚り、この君 (中君) の御ことの心ぐるしさに思みだれて、かのの

給しやうにて、(中君を) 形見にも見るべかりける物を (一中略) などおぼす。かりそめにも京にも出で給はず、かき絶え、慰む方なくて籠りおはするを… (総角卷四六〇〜四六一頁)

③ (大君を) 恋わびて死ぬるくすりのゆかしきに雪の山にや跡を消なまし

半なる偶教へむ鬼もがな、ことつけて身も投げむ、とおぼすぞ、心ぎたなき聖心なりける。 (総角卷四六二頁)

④ 思ひわびては、なかゝるさま (弁尼のような尼姿) にも

(大君を) なしたてまつらざりけむ、それに延ぶるやうもやあらまし、さてもいかに心ふかく語らひきこえてあらましなど、一方ならずおぼえ給に… (早蕨卷一四頁)

⑤ なを、この (中君の) 御けはひありさまを聞き給たびごとくに、などでむかしの人の御心をきてをまたがへて思ひ限なかりけんと、悔ゆる心のみまさりて、心にかゝりたるもむつかしく、なぞや、人やりならぬ心ならんと思返し給ふ。そのまゝに、また精進にて、いとゞたゞをこな

ひをのみし給ひつゝ、明かし暮らし給。(宿木卷四七頁)

⑥かの山里のわたりに、わざと寺などはなくとも、むかしおぼゆる(大君の)人形をもつくり、絵にもかきとりて、をこなひ侍らむとなん思ふ給へなりにたる。(宿木卷八一頁)

⑦過ぎにし方の忘れればこそはあらめ、猶まぎるゝおりなく、もののみ恋しくおぼゆれば、この世にては慰めかねつべきわざなめり、仏になりてこそは、あやしくつらかりける(大君との)契りの程を、何の報ひとあきらめて思離れめと思つゝ、寺のいそぎにのみ心を入れ給へり。

(宿木卷一〇九頁)

⑧かゝることの筋につけて、いみじうものすべき宿世なりけり、さまざまに心ざしたりし身の、思のほかにかく例の人にてながらふるを、仏などのにくしと見給にや、人の心を起こさせむとて、仏のし給(浮舟の死という)方便は、慈悲をも隠して、かやうにこそはあなれ、と思つゝ、け給つゝ、をこなひをのみし給。(蜻蛉卷二七五頁)

これら八例は、いずれも薫が宇治で関わった三人の女性たちを失った結果、「道心」に思いを致す場面である。「恋」を失ったことを契機として、仏に思いを馳せたり、勤行を実施したりする全場面を引用した。いわば、「恋」の喪失を契機に、薫が自らの宿世を見つめ返し、他者とは違うありかた、つまり「道心」へと薫が回帰するはずの場面である。

現に、⑤⑦⑧にはそういった薫の内実が示されている。⑤は、中君を匂宮に譲ったことを悔やみつつも「いとどたゞをこなひをのみしつゝ、明かし暮らし給」と、「恋」から目を背け、「恋」を否定するために「道心」が発動している。⑦は、未だ消えない大君への思いについて、自ら成仏した上でどのような前世の報いか明らかにして未練を断ち切ろう、と考える薫の内実であり、「恋」を断ち切る力として「道心」が働いている。⑧は、浮舟の死を知り、「恋」を失う宿世に思いを致し「をこなひをのみし給」のであり、「恋」から目を背け、「恋」から解放されるべく「道心」が作用している。

それに対して①②③④⑥は、むしろ逆の方向に薫の内実が動いている。「道心」が「恋」の方便のため、あるいは「恋」の肯定のために持ち出されているのだ。①は、大君の死を看取った際、仏の試練なら大君の醜い姿を見せて自分の悲しみを消してほしい、と思う薫の内実である。そもそも恋心を仏の力で和らげてくれという薫の言い分自体が真摯な「道心」の姿とは思いくい。また、「まことに世の中を思すてはつるしるべならば」とあり、薫は「世の中を思すてはつる」ためには大君の「醜い姿」を見る必要があると考えていることが知られる。しかし、薫が本心から大君が「醜い姿」に変わることを欲しているはずもなく、所詮大君への恋心の強さを、仏を引き合いに出すことで表白しているに過ぎず、むしろ大君への執着の強さが表れた場面と言えよう。②は、大君

の死をきっかけに出家したいが、母女三宮や中君を思つて実行に移せない、と思ふ薫の内実である。母女三宮はさておき、中君への思いというのは、決して後見人に徹する感情ばかりではあり得まい。この時薫は、大君に謀られたとは言え中君と近く一夜を共にしている。この時の自制を、薫自身が以後何度となく後悔するのは周知の通りである。また、前にも見たとおり、大君や中君への「恋」は自身の出生の秘密を隠すためとの薫の意志も橋姫巻、椎本巻時点で明らかになつていた。つまり、この時、出家に優先する中君への思いに、「恋」心に関わつてゐること明らかなのであり、その点において⑤⑦⑧とは心の向かう方向が対照的だと言わざるを得ない。③は、大君への恋心ゆえに仏の名に言寄せて身投げしたいという薫とそれに対する草子地である。薫の論理は、仏の教えにかこつけた「恋」への殉死であり、これは仏の名を借りた「恋」への傾斜に他ならない。「道心」が、「恋」に更に突き進むための方便として利用されてゐること明らかであり、だからこそ、この矛盾に草子地も「心ぎたなき聖心」と揶揄するのである。④は、大君の出家を許していればその功德で寿命が延びてまだ大君と語り合えたと悔やむ薫の内実である。「恋」心の継続の手段として大君の出家を位置付けていることが窺える。⑥は、大君への慕情から宇治に人形を設置しようとして中君に薫が申し出る所である。そもそも亡き恋人の「人形」に祈ることが果たして仏道修行と言えるのか、疑問では

あるが、「寺などはなくとも」とあることから、仏道の色あいが薄くなつてゐることは明らかである。大君との「恋」を偲ぶよすがを宇治の地に作りたいために「をこなひ」の名を持ち出したに過ぎないのではないか。

以上の通り、「⑤⑦⑧」の例と「①②③④⑥」の例とは、どの女君を対象とするかに関わらず、女君たちを失つた薫が「道心」に思いを致す点においては共通するものの、その「道心」が、直ちに「恋」に対して肯定的材料として働くか、あるいは否定的材料として働くかについては、実に対照的である。いわばベクトルの向きが対照的なのである。これは一体どういうことなのか。なぜ薫の心性は一貫せず、対照的な揺れ方をするのか。このベクトルの向きを決定する、物語としての基準や法則が存在しないのであろうか。

それぞれの「心性」を呼び起こす〈場〉の力に注目したい。「⑤⑦⑧」の〈場〉は都、「①②③④⑥」の〈場〉は宇治、なのである。⑥が最もこの「法則」について示唆的である。薫の今いる〈場〉は「都」である。「⑤⑦⑧」同様、「恋」の否定にベクトルが向いてもおかしくはない。しかし、その薫に強く想起されてゐる〈場〉が「かの山里」、つまり「宇治」であること明らかである。「宇治」という〈場〉こそが鍵だったのだ。②の点線部、「京にも出で給はず」とあることもその傍証とならう。つまり、薫は、「都」に根差してゐる時には、「道心」を「恋」を否定するものとして働かせ、逆

に具体的に心が「宇治」に強く揺れたときは、「道心」を「恋」の方便として働かせるのだ。つまり、「宇治」は、「恋」を呼び起こし「恋」に資するものとして「道心」が位置付けられる〈場〉、もっと言うなら、薫の「道心」が「恋」によって名目化され解体されていく〈場〉としてあるのではないか。そして、対する「都」という〈場〉でこそ、「恋」を否定するものとして薫の「道心」は発動されるのではないか。どの女君かが「法則」に関わるのではない。あくまで、〈場〉と「道心」のベクトルとが連動する仕組みになっているのだ。薫は、「都」で「道心」を回復し、「宇治」でそれを解体するのである。本来の〈場〉の意義が逆転しているところに薫の特徴がある。鈴木日出男氏は、薫は「奇特な道心」や「現世」に対する憂愁や懷疑「ゆえに「世人の絶讃を集め」、「現世繁栄」する、と述べられ、薫が「道心」を垣間見せることによつて都の世界で「繁栄」していくさまを明らかにされ、薫の特異性を指摘された。確かに、「もとより思人持たりて、聞にくき事うちまじくはたあめるを、つゐにはさやうの事なくてもえあらじ、さらぬ先に、さもやほのめかしてまし」(宿木卷三二頁)と、帝は、薫が「思人」を持たないがゆえに女二宮の相手として白羽の矢を立てたのであり、薫の、浮き名と縁遠い思い沈んだ人物像が、皇族との繋がりを切り開いたのであった。つまり、薫は、「道心」を基調に思い沈めば沈むほど、逆説的にも「栄華」が淀みなく身に添って

るのであり、その〈場〉として「都」があるのだ。だからこそ、薫は「宇治」での行動について、人目や人聞きを気に懸ける姿を描かれるのだ。「道心」の、そして「罪」意識の「解体」は、「宇治」という〈場〉でのみ成立する事象なのであり、「都」という〈場〉は、決して薫の「栄華」を妨げないのである。

しかし、ここで疑問も湧出する。薫が「宇治」という〈場〉に惹き付けられれば惹き付けられるほど、当然薫は軸足を「宇治」にずらすことになる。都の「世人の絶讃を集め」る機会は、ただでさえ減少するはずであろう。しかも、「宇治」は薫の「道心」を「解体」する〈場〉としてあるらしい。薫が「宇治」に足繁く通うのであってみれば、薫の「罪」意識は、漸層的に去勢されていこうし、「道心」が「恋」に食い破られていくのならば、「道心」ゆえに身に添う薫の「栄華」も揺らいでくることになるはずである。しかし、薫は「罪の恋と栄華」の物語〈層〉を主導するのであった。「帝の御婿としての地位名望の上に、でんとあぐらを組んだ賢者の風貌がある」薫の姿は、その「罪」意識の去勢と関わりなく完満なる「栄華」を享受しているように見える。どれほど「宇治」の〈場〉に薫が足を踏み入れたとしても、薫の「栄華」には影響がないようにも見えるのだ。果たしてこの点はどう考えれば良いのであろうか。

確かに、薫は女二宮の降嫁を受け、今上帝の婿の立場を手

に入れてはいる。しかし、薫は、幼少期より女一宮への憧れを描かれてもいた。そのことと何か関わりないか。本文を確認しよう。引用は考察の便宜上、巻順に拠っていない。

ア(中君の)にほひやかにやはらかにおほどきたるけはひ、  
女一の宮もかうざまにぞおはすべきと、ほの見たてまつりしも思くらべられて、うち嘆かる。(椎本巻三七五頁)

イ女一の宮も、かくぞおはしますべかめる、いかならむおりに、かばかりにてももの近く御声をだに聞きたてまつらむと、あはれとおぼゆ。すいたる人の、おぼゆまじき心つかふらむも、かうやうなる御仲らひの、さすがにけどをからず入り立ちて心にかなはぬおりの事ならむかし  
： (総角巻四二三頁)

ウ姫宮(女一宮)の御方より、二の宮に御消息ありけり。  
御手などのいみじうつくしげなるを見るにもいとうれしく、かくてこそとく見るべかりけれとおぼす。

エ起き給へる女宮(女二宮)の御かたち、いとおかしげなめるは、これより(女一宮が)かならずまさるべきことかは、と見えながら、さらに似給はずこそありけれ、  
(女一宮は)あさましきまであてにえも言はざりし御さまかな… (蜻蛉巻三〇〇頁)

オこれ(女二宮)は(女一宮への思いを)慰めむに似げなからぬ御ほどぞかしと思へど、きのふかやうにて、われま

じりぬ、心にまかせて見たてまつらましかばとおぼゆるに、心にもあらずうち嘆かれぬ。(蜻蛉巻三〇二頁)

カことさらに(女二宮に)心を尽くす人だにこそあなれとは思ながら、后腹におはせばしもとおぼゆる心のうちぞ、あまりおほけなかりける。(宿木巻三三頁)

まず、アイから、薫が幼少期より女一宮に憧れを抱いていたこと、明らかである。特にイの傍線部からは、薫が密通すら想起していることが窺え、その憧れが決して淡いレベルのもでなく、薫にとって女一宮が具体的な恋愛対象として認識されていたことが分かる。ウからは女一宮の筆跡をすばらしいものと判断し更に思いを高ぶらせる薫の姿が読み取れる。エオは、氷を手にする女一宮を垣間見した後の薫の感懐である。女二宮の容姿と比較した上で、「さらに似給はずこそありけれ」と女一宮の魅力を数段上と判定し、「心にまかせて見たてまつらましかばとおぼゆる」と、心そのままに見てみたい、とまで思いを強くしている。つまり、薫の女一宮に対する憧れは、決して漠然としたものでなく、事実に基づいた、かなり具体的な恋愛衝動としてあるのである。そうあってみれば、カに窺える薫の心性には注意が必要になる。女二宮の降嫁を打診された薫は、「后腹におはせばしもとおぼゆる」、つまり明石中宮腹であれば良いのに、と本心を漏らしている。薫の明石中宮、ひいては光源氏の血への憧れが見え隠れするところではある。しかし、問題は、現実としてこの時明石中

宮腹の姫君は女一宮しか存在していない、という点なのだ。薫の、明石中宮腹の女宮と結婚したい、という願望を叶えられるのは、この時女一宮をおいて他には存在していないのだ。薫の望む条件を満たしうる唯一の女性が女一宮だったのであり、この時薫も女一宮に対する恋心を具体的なものとして抱いていた。そうあってみれば、薫にとっては、女一宮の降嫁こそが最善策だったのであり、女二宮との結婚はあくまで次善策に過ぎなかったということになる。

ここで、薫に女一宮降嫁があったと想定し、【系図3】として試作してみる。

女一宮の母は、今を時めく明石中宮である。対して、女二宮の母、麗景殿女御は故人であり、その上、「御母方とても、後見と頼ませ給べきをぢなどやうのはかゞしき人もなし」(宿木卷三〇頁)とあって、女二宮には後見らしい後見もないらしい。ただでさえ薫は、父光源氏の死去、そして母女三宮の出家によって、後見に不安を抱えている。少しでも家の格上げを図っておきたいところであろう。女一宮との結婚は、中宮の婿になるということでもあり、家格の数段の格上げが期待できる。

更に、東宮、二宮、匂宮とも、同腹のきょうだいの結婚相手ということ、皇位継承者との関係が格段に近くなる。しかも、現東宮に続いては第二宮が「次の坊がね」(匂宮卷二二三頁)で、更に匂宮までも「帝が」筋ことに思きこえ給へ

る」(総角卷四四一頁)とあって、立場予定者に名を連ねている。この「連続する皇太弟」の問題については、本稿(下)で考えるが、いずれにしてもこの明石中宮腹の三兄弟が長期的に政権を握るのは確実で、後見に不安がある薫にとって、この義理の兄弟との関係は近ければ近いほどメリットが大きくなることは明らかであろう。つまり、もし薫が本心どおり女一宮と結婚できたとするならば、前に述べた「権力の網の目」に薫も近しく繋がる【系図3】(点線部)であり、女二宮降嫁とは比較にならないほどの政治的メリットが見込まれ、従って薫の「栄華」の水準は格段に上がったはずなのである。無論、それは夕霧と今上帝の「権力の網の目」の直中に薫が組み込まれていくことを意味するのであり、別の言い方をすれば、「罪の恋と栄華」の〈層〉を生きる人物が「恋と栄華」の〈層〉に組み込まれるということである。それは、物語の対峙的〈二層〉構造を崩すことを意味しようから、そのような女一宮との関係が実現しようとは、私が述べてきた〈層〉の論理からは考えにくい、私が言いたいのは、女二宮降嫁による薫の「栄華」は、薫が本心から望んでいた女一宮降嫁に誘導される「栄華」からは、どう見ても数段劣ったものであるという事実なのだ。





君)のものし給はましかば、いかにもくほかざまに心分  
ましや、時のみかどの御むすめを給とも、得たてまつらざら  
まし」(蜻蛉卷三〇七頁)と考えている。もし、宇治大君が存  
命であつたならば、他の女君には心を向けなかつたし、降嫁  
すらも受けなかつた、というのである。つまり、女二宮との  
結婚は、宇治大君が亡くなつたからこそ実現した、言い換え  
るなら、宇治大君との恋があればこそ女二宮との結婚があり  
得た、ということである。そうあつてみれば、薫の大君への  
尽きせぬ恋心が、薫を女一宮でなく女二宮と結び付けた、と  
いうことになりはしないか。宇治大君の力が、薫の「栄華」  
を本来あり得たそれより数段劣つたものに誘導した、という  
ことになりはしないか。

更に、薫の「栄華」に關わつて氣になることがある。果た  
して、薫は本当に「栄進」しているのか。あるいは、薫の出  
世は、「栄進」と特筆できるほど速やかなのか。

薫が三位中将に昇進するのは十九歳の時であつた。同じ三  
位中将に光源氏は十八歳で昇進している。光源氏は特別と見  
ても、夕霧が正四位下の宰相中将に昇進したのは十六歳、三  
位クラスの中納言への昇進は十八歳であつた。この同じ中納  
言に薫が昇進したのは二十三歳、実に夕霧と五年もの開きが  
ある。同位階の役職ではあるが、夕霧の大将昇進は十九歳、  
薫に至つては二十六歳で、ここでは七年もの差がある。果た  
して薫の出世ぶりは、目覚ましい「栄進」と言えるのだろうか。

か。

ここで思い起こしたいことがある。薫は、夕霧からも紅梅  
からも婿になるように申し込まれていたことがあつた。夕霧  
からは六の君を、紅梅からは中君を薦められていたのであつ  
たが、薫はそのいずれもを断つたのであつた。しかし、これ  
も仮に、薫がいずれかの、就中、夕霧の縁談を承諾してい  
たらば、どうであつたろうか。前に見たとおり、薫は後見者  
という点において心許なさがある。しかし、六の君との結婚  
が成つていた場合、薫は、夕霧、雲居雁という当代隨一の政  
治家一族を後見に揃え、更に落葉宮という皇族とも姻族とし  
て近しく繋がることになる。後見、家格とも格上げが叶うの  
だ。後見者の力が権力掌握を左右するのは、光源氏と秋好の  
例を挙げるまでもない。両親が後見者たりえない薫は、今冷  
泉院を後見人としている。「御元服なども、院(冷泉院)にて  
せさせ給」(匂宮卷二五頁)とあつた。しかし、後継ぎなく  
退位した冷泉は、今や皇統の中心からは外れた人物と言わざ  
るを得ず、「権力の網の目」からは距離を置いていると言え  
よう。また、冷泉院の後、秋好も「後の宮も、御子たちなど  
おはせず、心ばそうおぼさるゝまゝに、うれしき御後見にま  
めやかに頼みきこえ給へり」(匂宮卷二五頁)とあつて、む  
しろ薫を自分の後見人として頼つてることが知られる。つ  
まり、薫の現在ある「栄華」は、夕霧の婿として享受しうる  
それとは比較にならない程度のもではなかつたか。夕霧の

婿として十分な後見を受けていれば、あるいは光源氏や夕霧以上の「栄進」を果たしていたのではなかったか。

ここで注目したい叙述がある。

さるべき人して（夕霧は薫の）気色とらせ給けれど、世のはかなさを目に近く見しに、いと心うく、身もゆゝしうおぼゆれば、いかにもくさやうのありさまは物うくなん、とすさまじげなる（薫の）よし（夕霧は）聞き給て……

（早蕨卷一九頁）

薫は「世のはかなさを目に近く見」たことで、「心うく」、そして「ゆゝしう」思うがゆえに「さやうのありさまは物うくなん」と考えた、という。薫の「近く見」た「世のはかなさ」というのが、宇治大君との死別であること明らかであり、それゆえに「さやうのありさま」、つまり六の君との結婚に気乗りがしない、というのである。つまり、宇治大君への尽きせぬ執心が、薫と六の君との結婚を妨げるのである。そして、それは同時に薫と「権力の網の目」との接続を妨げる力ともなっている。やはり宇治大君なのだ。薫を、本来あり得た「栄進」、そして本来あり得た「栄華」から引き離す力として、薫の、宇治大君への執心は機能しているのだ。薫の現状は、決して完満なる「栄華」とは呼べない。薫が「宇治」に目を向けず、都に根差していればあり得たであろう強大なそれとは、どうあっても大きな懸隔がある。いわば、薫にあ

り得た「栄華」の体制が解体しているのである。つまり、「道心」の「解体」の〈場〉たる「宇治」の力が関与するがゆえに、薫に本来あり得た「栄華」は、〈解体〉していくのである。

そうあってみれば、「宇治」とは、夕霧の「恋と栄華」の〈層〉と同時に、薫らの「罪の恋と栄華」の〈層〉についても、その「栄華」を〈解体〉すべく機能する〈場〉ということになりはしないか。言い換えるならば、「宇治」という〈場〉は、二層構造のそれぞれの「栄華」のありかたを、いずれも〈解体〉し、弱体化させていく力源としてあることになりはしないか。

無論、このような言い方をすると、「罪の恋と栄華」の〈層〉の構成者たる匂宮が、「宇治」という〈場〉の構成者たる宇治中君と結ばれ、皇位継承権を持つかもしれない若宮を儲けることをどう考えるのか、という反論があるかもしれない。しかし、匂宮にとって、宇治中君との間の御子が真に有力なのだろうか。薫同様、「後見」という観点から考えたとき、宇治中君との間に御子が産まれるよりも、夕霧の六の君との間に御子が産まれた方が圧倒的に有利なのではないか。宇治中君には両親はおらず、後見者は薫である。その薫自身も、「後見」の観点からは決して磐石でないこと、見たところである。何より、もし六の君に男御子が産まれた場合、薫が、これ程今上帝と緊密に結び付いた夕霧に刃向かって、宇

治中君を強引に中宮に押し上げることができようか。夕霧の作り上げた「権力の網の目」の力が、薫の力を凌駕することは目に見えている。つまり、匂宮も、薫同様、宇治に目を向けることで、本来あり得た強大な権力から遠ざかってしまっているのだ。いわば、宇治中君の力も、匂宮の「栄華」を弱体化させる力源として働いているのである。

正しく「宇治」という〈場〉の力は、「恋と栄華」の〈層〉、そして「罪の恋と栄華」の〈層〉に生成した権力体制を弱体化すべく働いている。源氏物語の〈二層〉にそれぞれ駆動する「栄華」への歩みを〈閉塞〉させ、そして本来あり得た「栄華」の諸相を〈解体〉する、そういった力源として「宇治」という〈場〉の物語は機能しているのである。

注

- (1) 三谷邦明氏『源氏物語疑系』有精堂 平成3年10月
- (2) 藤井貞和氏『宇治十帖』論—王権・救済・沈黙』『源氏物語入門』講談社 平成8年1月
- (3) 小林正明氏『夢浮橋—源氏物語五十四帖をよむ』『新・源氏物語必携』学燈社 平成9年5月
- (4) 拙稿『夜ごとと十五日づつ』通う夕霧（投稿中）
- (5) 拙稿『夕霧〈不在〉の論理—夕霧の機能と物語の〈二層〉構造—』『國語國文』第七十四巻第十号 平成17年10月
- (6) 引用の源氏物語本文及び頁数は岩波書店『新日本古典文学大系 源氏物語』に拠る。なお、『新大系』の底本は大島本であり、そ

れを欠く浮舟巻のみ明融本である。

- (7) 拙稿「柏木不在の論理—柏木・弁少将の機能と夕霧・弁少将の対峙の構造—」『詞林』第三十五号 平成16年4月
- (8) 『新大系』本脚注
- (9) 今井久代氏「鈴虫巻の対話—光源氏の宿世と人々の受難—」『源氏物語構造論—作中人物の動態をめぐって—』風間書房 平成13年6月
- (10) 拙稿『夕霧〈太政大臣予言〉の論理—（投稿中）』
- (11) 『新大系』本脚注
- (12) (5) 及び(10)の拙稿
- (13) (4)に同じ
- (14) 鈴木日出男氏「宇治の物語の主題」『源氏物語研究集成』第二巻 源氏物語の主題下 風間書房 平成11年9月
- (15) 薫が人目を気に懸ける例  
(対大君) おなじあたり（大君の居所を）かへすかへす漕ぎめぐらむ、いと人笑へなる棚無し小舟めきたるべし、など夜もすがら思あかし給て…（総角巻四〇九頁）  
(対中君) かいなき物から、人目のあいなきを思へば、よろづに思ひ返して（中君の部屋を）出で給ぬ。（宿木巻五八八頁）  
(対浮舟) ものくしげにてかの宮（三条宮）に（浮舟を）迎え据へんもをときき便なかるべし…（東屋巻一八二頁）・まして人目はいかに。（夢浮橋巻四〇五頁） など
- (16) 秋山虔氏「薫大将の人間像」『源氏物語の世界—その方法と達成—』東京大学出版会 昭和39年10月

（なかい・けんいち 本学大学院研究生）